**小山　路夫（おやま・ろふ）**

**1、プロフィール**

詩人。戦後、南津軽郡藤崎町の自宅（運送店）の二階に、「雪の社」を創設した。詩誌「雪」を主宰し、自身も優れた抒情詩を発表した。

＜生没＞

1923（大正12）年６月13日～1990（平成２）年２月16日

＜代表作＞

抒情詩「私は歌を唄ひます」、「早春」（詩誌「雪」第10号）。

晩年に、歌集『雪』を発行。

＜青森県との関わり＞

南津軽郡藤崎町出身。東奥義塾を卒業後、東京で木箱の製造業を営む。妻の病により大鰐町の長女方に帰郷。

**２、作家解説**

おやまろふ、露西亜人の様な筆名。本名は小山光男である。小山は大正12年６月13日、南津軽郡藤崎町で父太一、母たけの四男（第七子）として出生。家業は駅前で林檎関係の運送店（ 屋号）を営んでいた。弘前の東奥義塾を卒業後、町内の「㈱青森林檎加工」で林檎ジャムの製造に携わっていた。戦時色が濃くなっていく中で、次第に文芸に興味を抱くようになった。

敗戦後の混乱の最中、小山は運送店の二階に詩社「雪の社」を創設し、詩誌「雪」を主宰した。詩誌「雪」は、第10号まで発行されたらしい。他に、「一戸謙三詩抄」の刊行も手掛けた（『追憶帖』等の発刊）。当時、一戸は度々「雪の社」に、弘前から列車で足を運んでいる。どちらも、丁寧な手書きの字面が、多色刷り（孔版印刷、秋田県の阿仁合 北線社）で飾られている、「思わず詠んで見たくなる」、そんな素晴らしい詩誌である。その中から小山の一篇である。「私は歌を唄ひます。／ひとり寂しく遣瀨なく／涙に頬の濡れるとき／そつと想ひを繙いて／私は歌を唄ひます。／たとへリズムは合はずとも／やさしい歌を唄ひます。／　 ／私は歌を唄ひます。／ひとり悶える苦しさに／どうしてよいやら迷ふとき／そつと心を打ち開けて／私は歌を唄ひます。／たとへリズムに合はずとも／静かに歌を唄ひます。」（詩誌「雪」第10号）

昭和36年に小山は、上京。埼玉県で事務職に就いた後、東京都葛飾区で「丸和木箱」と言う会社を経営し、木箱などを製造した。同54年に妻の病をきっかけに津軽に戻ることになり、長女（松岡路美子）の嫁ぎ先である南津軽郡大鰐町で10年余りを過したが、肺を患い体調は優れなかった。晩年、小山は歌集『雪』を発行した。（小山路夫、自費出版、同61年８月）225首もの歌が詠まれている。その内の３首である。「病窓に盆踊の音しのび入り 意識もうすき妻と聞き居り／雪よ降れ雪よ降れ降れもっと降れ 浮世の愁え埋れるほどに／この冬もゲレンデのある町に住めど シュプールもかけず胸わるき我は」 平成２年２月16日、多臓器不全により死去。享年68歳。松岡家の菩提寺である大鰐町大円寺の墓所に眠る。

**３、資料紹介**

〇詩誌「雪」（第10号）

雑誌

1949（昭和24）年６月20日

265mm×185mm

戦後、藤崎町に「雪の社」を創設し、詩誌「雪」を主宰した。小山路夫（おやまろふ）の筆名で、自身も抒情詩を発表した。他に、「一戸謙三詩抄」（一冊目は『追憶帖』、二冊目は『茨の花』）の刊行も手掛けた。晩年には、大鰐町で歌集『雪』を発行した。